

ベケット、悪魔払いの文学

堀田敏幸

一、戯画

ベケットは小説『マーフィー』（一九三八年）を一見、異常と思わせるような場面から描き始めている。それは主人公のマーフィーが彼の住居の部屋で、「ロッキング・チェアに裸で座っていた」というものである。これだけであるなら、読者はイギリスのような太陽に乏しい国では日光浴をしているところだと理解して、単なる日常の光景と見なすであろう。ところが、この部屋はカーテンによって日光が遮断されていた。それなら、読者を驚嘆させるようなことは何かといえば、マーフィーが自分の体をロッキング・チェアに横たえるだけでは満足せず、「七本のスカーフで固定」させていたという説明である。なぜ、彼は椅子に体をくくり付ける必要があるのか。彼には肉体に不自由なところがあって、すべり落ちるのを防いでいるのか。そうではないと、小説は言う。彼がそのような方法を取るのには、その姿勢が気持ちよくて肉体に「快感」を与えてくれるためであった。

それでは、なぜ肉体を椅子に縛りつけることが快感になるのか。それは肉体が固定されていることで安心感が生まれ、精神を「解放」してくれるからであると、小説は理由づける。肉体の安らぎと精神の解放には

相関関係があると言わんばかりであるが、それにしても、なぜマーフィーは単にロッキング・チェアに体を横たえて休息するだけでは満足できず、それをスカーフで固定させることまでするのか。両足、^{もも}腿、腹、胸、そして「両手首を背もたれの横木」に縛りつけたのである。しかも、これを誰か他人にしてもらったのではなく、自分で汗が流れる程にまで苦勞して作業をしなければならなかった。まるでマゾヒストの如くなのである。恐らく彼は自分を椅子にくくり付けた後は、自分でも容易にそれから逃げられない状況を作り出したのであろう。体を固定する作業は苦勞ではあったけれども、その後の椅子に不都合なく身を任せられるという状態は、何にもまして法悦であったことを語っている。

椅子に体を縛りつけて身体を拘束することは、生活の習慣や義務を停止させ、その人物を日常世界から解放することを意味する。この行為がその人物にとって嫌悪をもよおすものでなければ、それは日常性からの離脱を容易に可能にするものであろう。しかも、身体の拘束は人間生活のあらゆる行為を停止させることにはならない。なぜなら、身体は囚われの身であるとはいえ、それがその人物に孤立の不安や生命の危険をもたらすものではないために、彼の精神にはかえって余裕すら生じることになる。肉体が静止状態に置かれていることは、彼に精神の安定的な活動を保証する。精神は現実世界が身体に加える動揺から解放されて、自身の自由な思考を働かせることができる。勿論、現実世界は精神に対しても直接的な影響を及ぼすであろうが、部屋の中に閉じこもり椅子に身体を固定した状況では、外界の影響は軽微であり、精神はその思考内容を自由に選択することが許されている。

マーフィーは肉体の存在を最小限に留め、自分の精神の中で自由気ままに思索をめぐらすことに悦楽を覚える。ところが、精神は対象がどんなに微かなものであれ、どんなに遠く離れたものであれ、またどんなに過去の忘れ去られたものであれ、どんなに未知のものであれ、すばやく

感応してしまう性質も同時に身に付けている。マーフィーの耳が窓から聞こえてくる外界の音を感じ取るや、精神はそれに対して何らかの判断を下さざるを得ない状況に立たされる。ロッキング・チェアに身体を固定したマーフィーは、鳥のカッコウが鳴き、道路での物売りの叫び声が響き、人の声が聞こえてくると、こう反応する。

そうした光景や物音は、彼の好まないものだった。それらのものは、それらが加わり、そして彼の方ではできれば加わりたくないと願っている世界に、彼を引き留めていた。彼は自分の輝きを解体させているものは何なのか、物売りが叫んでいるのは何なのかと、そっと自問してみた。そっと、ほん⁽²⁾とにそっとだけ。

肉体は外界に向けて活動することを禁止された。しかし、肉体の一部である目や耳はその拘束から逃れている。むしろこれらの器官は、肉体よりも精神に直結している感覚器官と理解した方が正しいであろう。目は肉体として他人にその形相で怒りや悲しみを訴えることはできるが、それ以上に外界の出来事を視覚として認識する。耳は肉体としてよりも、もっぱら外界の音声を聞き取るという聴覚の認識作用だけに機能が限定されている。この両器官とも肉体の一部として人間に付与されながら、これらは精神に判断材料を提供する役目を果たしている。

マーフィーの精神は外界の光景や音声、つまり人間や動物といった自然界の営みを「好まない」と言う。しかも、彼はそれら自然界に対して、彼が「加わりたくないと願っている世界」だと断定を下す。なぜマーフィーは自然界のものに嫌悪を覚え、しかもその世界に彼が所属したくないと考えるのか。自然界とは本来、人間もそれに属しているはずの世界ではないのか。マーフィーにとって、また作者のベケットにとって、肉体は自然界に属しているけれども、精神はそれとは別次元に帰属してい

る存在であるのか。

マーフィーは、「物売りが叫んでいるのは何なのか」と問う。何の品物を物売りが売ろうとしているのか、彼に聞き取れなかったと言うのであろうか。恐らくそういうことも有り得よう。しかし、彼がその日の生活物資に興味を持っているなら、彼の語る言葉は品物の種類に関心が向かうはずである。ところが、彼の言葉は商品の品物からは的が外れていて、まるで商売とは関係のない何か別のことを捉えようとしているように受け取れる。それは鳥の声と同様、初めから意味のないものとしてマーフィーの精神に認識されている。鳥の声であろうと物売りの声であろうと、つまり自然界の単純生物の音声であろうと、人間の意志的な音声であろうと、彼には区別なく、それらの音声は意味があると同時に、何の意味も含まないただの音として認識されている。それらの音に対し意味を付与するかどうかは、マーフィーの精神にだけ係わっている。彼は自然界の物音を好まないし、その世界に帰属したくないと言う。

自分とは別世界のことに関して、自分が帰属していないと考えている世界のことに関して、人間は意味を与えようとは思わない。意味を与えたところで、それは生存全体の関連性において、連結した意味内容を構築できないのだ。一つの言葉が意味を持ったとして、その意味が人間の生きていく条件とどう係わるのかが理解できなければ、孤立したその一つの意味は空中分解してしまうだけであろう。言葉の意味とは、生存の目的に合わせて連鎖を形成するものだからである。マーフィーは現実世界を拒絶しているのであるから、彼は生活上の単純な物売りの声に対し、鳥の声と同様にその意味を把握できず、疑問に付すことになる。ただし精神が働いている以上、彼は目で見た光景や耳で聞いた音声に対し、何らかの意味を捉えようと絶えず意識を集中している。彼の生活が孤立しているとはいえ、また現実生活の拒否を熱望しているとはいえ、彼にも彼なりの別世界が存在する以上、その世界に向かって意味を構築するこ

とから逃避することは許されない。人間が生存している以上、その者にはその者独自の世界が必ずや形成されている。

ベケットはマーフィーがロンドンに住み、ロッキング・チェアに裸の体をスカーフで固定し、鳥の鳴き声や物売りの声を好まず、現実世界を忌避し、拘束された肉体は精神に自由をもたらすことを、まるで序文であるかのように、小説の冒頭わずか二ページの中に断片的に書き連ねた。そして、この短い挿話はこれで終了してしまう訳ではなく、むしろ小説の中心的イメージとして語り継がれていく。

現実生活を嫌うマーフィーにも恋人がいた。それはセリア(シーリア)という名前の女性で、マーフィーは彼女に結婚を申し込んだ。ところが、結婚生活をするだけの十分な収入が彼にはない。彼は「わずかな慈善のお金」で生計を立てているらしい。セリアは一応、求婚を承諾したのだが、一緒に生活してみると、仕事に就かないマーフィーと仕事を辞めたセリア、二人の無収入者にとって結婚生活は成り立たない。マーフィーがやむを得ず仕事探しに外出している間、セリアは彼のロッキング・チェアに座って、わずかの日光を浴びながら帰宅を待つことになる。

ロッキング・チェアに座っていると間もなくして、彼女は名づけられないような欲情の表れのごとく、裸になって縛られたいという欲求が、かすかに湧き起こってくるのを感じた。⁽³⁾

なぜ無収入のマーフィーに、セリアは愛情を抱くことになったのか。小説の中でも別の人物、心臓を止められるという特技を持つニアリイも、「女たちがマーフィーの何を魅力的と思うのか、わたしには分らんね」⁽⁴⁾と言っているが、なぜセリアは結婚を承諾したのであろうか。恐らく彼女がマーフィーを愛するのは、彼が世俗の価値に無頓着で、人間社会の義務感を放棄した純粋な人間として映るからであろう。社会に背を向け

た人間は孤独である。この人間は他人に対し、悪事を働いている訳ではない。ただ社会の規律にのっとって、他者と同調した行動を取れないだけである。彼は社会の仲間から軽蔑の視線を投げかけられて、苦痛を味わっている。彼を助けようとする人物は、この社会に誰もいない。たとえば彼が社会团体や宗教団体から少しばかりの「慈善のお金」を受け取ることがあるとしても、それらは彼を孤独から救出できるような力は持たない。彼の孤独と貧しさを救える人物はいないのか。それを手助けできるのは、人の愛情ではないのか。そう思ったとき、女たちは、そしてセリアは彼に愛情を寄せることになったのであろう。

しかし、結婚してからの共同生活は彼女にも孤独をもたらす。マーフィーは仕事を探しに外出する。その間、セリアは街中や市場を見て回り時間をつぶすことも可能だが、彼女はマーフィーが座っていたロッキング・チェアに今度は自分が座りこむことを選んだ。彼女は椅子に体を沈めると、自分の不安が微かに感じ取れるように思うのだった。その不安とは何か。それはマーフィーが発した予言である。「生活のために働くことで、彼は生の実質を失うであろう⁽⁵⁾」と、マーフィーは予言した。セリアはこの言葉を最初は馬鹿げていると思いはしたのだが、やがてこの意味するところを少しずつ理解するようになる。彼女は街中で働いている人たちを見る。そして、その人たちが働くことを止めたなら、どういう状況になるのだろうかと考える。こういう思案にとらわれたとき、彼女はロッキング・チェアに座って時間を過ごすことを選んだのだし、そしてマーフィーの予言が何を意味するのかを考え始めたのだ。彼女はマーフィーがしていたように、「裸になって縛られたいという欲求」に共感を覚えるようになった。しかし、これは「生活のために働くことで生の実質を失う」という予言の、全面的な受諾には到らない。彼女はまだ迷っている。椅子に縛られたいという願望は、予言の不安を鎮めようとする彼女の一時的な処置に留まっている。

「生活のために働くことで生の実質を失う」、これは作家ベケットの偉大なテーマである。これを作品の全面に押し出した作家はいるのだろうか。カフカなら、どうであろうか。『審判』は銀行の仕事にたずさわり、人間としての本来の在り方を忘れている人物に有罪の判決が下されるという内容で、労働の意義を問い直している。ただし、この作品は労働と人間の生き様を問うているとはいえ、その生き様がカフカの宗教であるユダヤ教との関連で捉えられているところが、人間本来の生という観点からは限定的であるように思われる。ベケットでは宗教の言葉が取りあげられるが、その宗教の実践という点では距離を置いている。ベケットは生存自体の生き様を問題にしている、宗教的教義を特別扱いすることはない。彼は労働を拒否することが社会との関連でどのような意味を持つか、という点に論点を集中している。彼の作中人物たちが労働を放棄することで社会から孤立し、精神分裂病になり、狂気に落ちいり、そして死へと導かれるという構図の中で、ベケットは作品を展開する。労働はベケットの人物たちにとって、精神活動と生存の自由を奪うという点において罪悪視されるのである。マーフィーは恋人セリアに向かって言うだろう、「目的のある愛なんて、きん玉が痛くなるさ」⁽⁶⁾。愛は社会的目的や家庭的目的、ましてや経済的目的とは無関係に、愛情自体において成立する。これがベケットの掲げる生き様であるだろう。

愛が愛以外の目的を禁じたように、ベケットは人間の生存に労働が不可欠であるという考えを排除した。彼の主人公マーフィーは仕事に就くくらいなら、家でロッキング・チェアに座っている方を選択するであろう。しかも、彼はこれだけで十分とはせず、裸の体をスカーフでその椅子に縛りつけるという戯画まで演出した。なぜこのように作家は、彼の登場人物に滑稽といえるほどの誇張をほどこすのであろうか。勿論、これはマーフィーという主人公の趣向と呼ぶ程度の所作ではあるだろう。服を着用しているよりは、裸の方が労働にはげむ人物というイメー

ジからは遠ざかることができる。ただ単に椅子に腰をおろしているよりは、身体をそれにくくり付けた方が、労働からは放免された別の次元にいることを、その人物に納得させるだろう。

マーフィーは自らを拘束する。これは何か悪事を働いたために監禁されているのではなく、労働という必要悪から人間を保護するためである。彼は自分の部屋で肉体を固定し安堵感を与えておいて、人間のもう一つの活動領域である精神を自由に飛翔させようとする。しかし、何もベケットの作中人物が、深遠な哲学書や宗教書によって思索するわけではない。彼の思考はいたって身近なことの空想に留まっている。彼は労働という必要悪の犠牲になりたくない、渴望するだけのことである。彼は社会から孤立するだろう。この社会に対し、マーフィーは自らを戯画化することで対峙している。

二、悪魔払い

マーフィーは労働を拒絶する。彼のロッキング・チェアに体をくくり付けた姿は、彼を労働に駆りたてる社会通念に対して強力な反旗と見える。彼は自分の部屋の中であって、自らを拘束状態に置く。肉体の放棄によって、彼は精神活動への集中をはかろうとする。精神が頭脳の中で企てることに対して、外なる人間社会は彼に何も命令を下すことができない。彼の精神は誰にも拘束されることなく、その自由を謳歌する。しかし、人間社会との離反を決意したはずのマーフィーにも、まだ異性との愛情という絆が残っていた。彼はセリアに恋をし、結婚を申し込む。彼は他者と共同生活を営むわけである。一人暮らしの時のように、その日の食事にも事欠くような極貧の生活を彼は続けられるのか。結婚相手はマーフィーが働かなければ、彼女自身が仕事に戻ると言う。彼は労働

が「生の実質」を喪失させるという予言の言葉を、彼女に投げつける。マーフィーは、そうはいえ、彼の職探しをする。

労働を軽蔑する人間にとって、彼が許容できる仕事とは何であろうか。それは、彼と人生の価値観を同じくするような人物のいる所で働くことである。人生の価値観が同じ人物、それは労働拒否という反社会的な考えの持ち主たちのことである。勿論ここで、反社会的な思考が労働拒否ということだけに限定されるものではない。愛情問題や社会での人間関係、生きることに對する信条や思想上の問題など、その時代、その土地で慣行されている様々な社会的価値に対して反抗することを意味する。こうした反社会的な価値観のために人間社会から逸脱し、狂気に落ちっていく人たちの収容されている所、それは現代社会においては精神病院である。ここに來る患者たちの病状はその程度が様々であろうが、マーフィーが看護人として働くことになったのは入院患者のいる病棟である。彼はこの仕事に対して嫌悪を示さない。「彼らはマーフィーにどんな恐怖も引き起こさなかった。彼にすぐに伝わった感情のうちで、一番確かなものは尊敬と羨望⁽⁷⁾だった」。

マーフィーと同様、ベケットの小説作品の中で労働に従事するもう一人の主人公はワットである。彼は小説の最初から、自分の職場に向かう人物として描かれる。その仕事とはノット氏という人物の住む邸宅で召使いとして働くというものだが、それはあまり他人との接触を必要としなくてもすむものなので、恐らくマーフィーのように労働嫌いな人物にも可能な仕事ではあろう。作者のベケットはワットの前任者に当たるアルセーヌに、こんな風に人生観を語らせている。

この人生のすべてのあいだ、表面的な無気力の苦しみと面白みのない仕事の恐ろしさの間を揺れ動いて、彼はついに頑固にも何もしないことが最高の価値と意味をもつ行為であるという状況に立ち至ったの

です。⁽⁸⁾

この文章はいったい誰のことを言っているのか、少々分かりにくいところがある。これを語っているのは前任者のアルセーヌでよいが、文章中の主語である「彼」とは新しく召使いとしてやって来た人物、つまりワットを指している。ところが、この文をアルセーヌがワット自身に向かって語っているために、「彼」というのが曖昧になっている。「彼」とはアルセーヌがかかってに想像したワットを、間接的にこう呼んだことになる。そうすると、文意が作中人物の推測ではあれ、これは作者が自分の考えを代弁させていると考えてよからう。

「彼」、つまりワットはこれまで仕事には就いてみたが、それは気乗りのしないもので、それを辞めては無為に落ちいるという繰り返しであったことになる。しかし、今回の仕事というのは少しばかり違って、「何もしない」でも十分にやっていけるような仕事であると、前任者のアルセーヌは言う。つまり仕事であって、同時に無為の気分をそぐことのない労働であると。それはどんな労働かといえば、召使いの前に姿を直接現さないノット氏の食事を作るというのが一番の役目である。しかし、これは重労働という程のものではなくて、一週間分の昼と夜の食事を一度に作っておけばよく、その内容も魚や動物の肉、野菜や果物、パンやチーズ、コーヒーや酒類、それに健康のための薬剤といったものを鍋でまとめて煮込み、雑炊のようなものを作るという単純なものである。この同じものを、ワット氏は毎回食べるのである。そして、残り物は他人の犬に与えてやる。これだけの簡単な作業であって、ノット氏は他に何も必要としない、まるで「無」と呼べるほどの秘密めいた存在である。ワットにもこの程度の仕事なら、続けられるであろう。

しかし、作者のベケットは非情だ。ワットがこのノット邸での召使いの仕事をしばらくの間続けられると思う気持ちを読者に与えることな

く、第三章になるや突然、彼を精神病院に入院させてしまうのである。その直接の原因を、作者は告げることを好まない。告げなくともすでに小説の流れの中で、ワットが社会とうまく折り合っていないことは、マーフィーの場合と同様であろう。マーフィーが鳥の光景や物売りの声に嫌悪を覚えたように、小説『ワット』（一九五三年）の主人公も自然界の事物——これには人間も含まれるであろうが——とにかく自然界のものが大嫌いなのである。その代表が月であり太陽である。そして、大地であり空である。月、太陽、空が嫌いとなれば、彼は光のある世界を避けて、夜の闇の中に生息するしかないであろう。そして、大地が彼の神経を逆なでするのであれば、ワットはどこへ行けばよいのだろう。マーフィーのように、そして彼が一時期その屋敷で働いたノット氏のように、部屋の中に閉じこもり、椅子に体を固定し、そして召使いにさえ姿を見られぬように隠れ住むしか、生存の方法がないのであろうか。

まるで^{あほう}阿呆であるかのように目を凝らして眺めると、隣の庭に疑いようのない程はっきりと、うしろ向きで私の方へ歩いてくる——誰だろう、そう、ワットその人であった。彼の歩き方はゆっくりとしてふらついていて、明らかに頭の後ろに目がついていないためである、それに苦痛であったろうと思える、というのも、彼は何度も木の幹にぶつかったり、からみあった茂みに足を引っ掛けたりして仰向けに倒れ、またイバラや野バラや、イラクサやアザミの茂みで転んだりしたから⁽⁹⁾だった。

ワットが足を進める歩き方は、肉体の健全な人間が行う方法とは逆転している。精神病院に入院している時の彼は、「うしろ向き」に歩くと言う。この歩き方と同様、彼は自然界、そしてそれを基盤とし、また支配下に置いている人間社会に反逆の目を向ける。彼がノット邸での仕事

を辞めることになったのは、労働自体が苦痛になったためではなく、それはワットがここへ着任した時と同様、この屋敷では二人いる召使いを適当な期間をおいて順次、交替させる慣例になっていたためである。ワットはノット氏の姿を真正面から直接見ることもなく、まして会話を交わすこともなく、無人の屋敷という以上に、まるで「無」そのものを表象するようなノット氏の生き様を体験して、彼はこの職場を去ることになった。彼にはこの体験が何を意味するのか。彼以上に労働に従事せず、他人にその姿すら影のような存在としてしか現わさず、毎日のように体の外見が変化して見え、食事も一週間分作った雑炊のようなものをほんの少量ずつ取り、家の中も家具が転倒して置かれているようなノット氏に、ワットは共感できる生き方を体得したのか。彼はノット氏のもとの仕事を辞した後は、彼の憎悪する自然界や社会生活の中へと戻ることになる。

ワットは彼に生の条件を与えている回りの環境に対し、どう対処するのか。彼は身の回りにある事物をこう捉える。「ワットをいま取り巻いている事物は、たとえ名づけられることを承知しているとはいえ、いわば身代わりとしてそうしているのだった⁽¹⁰⁾」。事物は元来、名前など持つてはいない。言葉を発明した人間が自分たちの生活にとって役立つような物の機能の一面を捉えて、勝手に名を与えたのである。だから、これを人間の側から検証し直すとしても、人によって事物の重要さの基準が食い違うために当然、名前が不適切に付けられていると判断することになる。詩人マラルメが主張したように、事物の内容とその音との関係が恣意的であるばかりか、名前自体もその根拠が曖昧である。だから、事物の名前はどんな物であろうと仮のものであるはずだが、人間の命名行為が社会秩序を構築している以上、これが正当性を得ることになる。

ワットは社会秩序に疑問を抱いている。そうであれば、この秩序を支える事物の名前は、彼にとって不当なものとして映る。彼はその例として

しびん
 渡瓶を取りあげる。この場合は渡瓶の機能とその命名を認めつつも、それが「真の渡瓶の本質からほんのわずかに外れていることが、ワットをこれ程までに苦しめていた⁽¹⁾」というもので、僅少の差異に彼はこだわっている。なぜこのような微妙なことが、彼の気にかかるのか。彼は初めから事物の名前を知らない方が気楽だと言うが、名前をすでに知っていることによって事物と社会的機能が結びつくために、その社会性が彼の嫌悪感を駆り立てるのであろう。社会性はこの現実世界から離脱したいと願っている人間にとって、非難の対象以外の何ものでもない。

事物の命名は、すべからく社会性を押しつけられている。これを取り払うには、どうしたらよいのであろうか。別の名前を付けてやればよいと考えるのは、限られた数の事物であるなら可能であろう。また同一の事物に対して、一つの言語であっても方言により幾つもの呼び名があるし、外国からの輸入物なら、翻訳名と原語名の二つを持つことは稀ではない。しかし、ワットの場合は少し意味合いが違う。彼は事物の名前が、「真の本質からほんのわずかに外れている」と言う。物の本質とは何か。これは非常に難しい問題である。ワットにとって物の本質とは、その命名者である人間社会と深い関係にある。人間が一つの事物に名前を与える。これはワットも認める行為であろう。しかし、その人間が本来の有りのままの人間として、命名行為を行っているのであろうか。社会組織によって抑圧されていない自由な人間として、この役目を果たしているであろうか。この社会は他者を犠牲にして、差別の上に成立した組織ではないのか。この社会性こそが、ワットの言うほんのわずかの差異として感じられるのではないか。

言語に付随した社会性を取り除くには、どうしたらよいのであろうか。ワットのように権力のない人間が自分自身の使用する言葉に対してだけでも、この邪悪を除去するにはどうしたらよいか。それは彼の話す言葉に対して、「悪魔払い」をしてやることであろう。言葉は社会によって

その純粹さを失っている。この抑圧された不純な性質を取り除いてやる
ことができれば、事物が有していた元来の意味が出現するであろう。こ
の悪魔払い（1）は勿論、社会全体の言語活動に対して効力を発揮するわけ
ではない。これはあくまでも、個人が言葉を活用する場合に限られる。そ
れというのも、言葉がまとうことになった邪正じやしよというのは、当面ある一
人の人物にとっての不合理であって、一般的な人間にとっては、これが
社会の規範として通用しているからである。言葉の持つ不合理性を問
おうとする人間は、その社会に対しても何らかの矛盾を感じている。いや
反対に、その社会に順応できない不信感を抱いているからこそ、言葉に
対しても違和感を覚えるのである。

ワットはしつこく付きまとう幻影に取りつかれたとき、必要に応じて
その幻影を取り払い、真の仮説を引き出すことができれば、勿論、
この試みは成功であると思った。この思考はワットの精神的習性とう
まくなじむものであった。というのも、ワットにとって説明するとは、
いつであろうと悪魔払い（12）をすることであったからである。

ワットは言葉の命名に対してと同様、現実生活の不審に思えることに
も、自分なりの説明を与えて「悪魔払い」を行う。彼にとって外的世界
は毒されているのだ。それは彼が自分を取り囲む世界に対して、信頼を
置いていないからである。信頼があれば、多少の矛盾があつたとしても、
人はその矛盾の上に博愛の橋をかけて飛び越えていくことであろう。と
ころが、世界に信頼を置くことの不可能な人間にとって、ちょっとした
矛盾も彼の行く手をふさぐ。彼はこの矛盾をどうやって解決すべきか。
それは現実世界の出来事を彼なりの言葉に置きかえて、悪魔払いを敢行
することであろう。彼の外的世界は、社会によって不当な方向に導かれ
ている。この不正を正すのに、社会生活に信用を置くことのできない人

物が為しえることといえば、その不正にまず言葉で悪魔払いをかけて、現実の有りようを始原の状態に戻すことであろう。悪は人間の精神に潜んでいると同時に、社会の中にも潜入しているからである。

彼は少しずつ混乱したものを言葉に変えていった。彼は古くさい言葉で枕を作り、そこに頭を休めた。少しずつではあるが、苦心もあった。例えば、ケイトが皿で食べている、とか、小人たちに見張られている、とか、これが何を意味しているのか知ろうとして、ワットはどんなに苦心したことか、すなわち、為されたこととは何か、こうむった行為とは何か、誰によって、何によって為されたのか、〔……⁽¹³⁾〕

ワットは混乱したものの、信頼のできないものを、「言葉に変えて」悪魔払いを行う。しかしながら、彼がここに挙げた一つ目の例は、常識から考えて少しばかり意想外なことと思われる。すなわち、「ケイトが皿で食べている」、これが彼には理解に苦しむことであると言う。何が不可解と言うのであろうか。ケイトか、皿か、食べるか。どれも実生活上、意味の明瞭なものばかりで、矛盾を生じさせるような事物も行為もない。そもそもワットは、「為されたこととは何か」と問う。食べるとは生物の根幹的な生存行為であって、人間も動物もこれを本能的に行う。「皿」で食べる。これは動物でさえも皿から食べるであろうし、現代人なら普通の手段である。なぜワットには、この人間の基本的行為が理解困難なのであろうか。彼は召使いとして、ノット氏のために食事を作ったではないか。それはあらゆる材料を煮込んだ雑炊のような奇妙な食べ物ではあったが、一応、人間の生命を維持していただくだけの栄養のあるものであった。そういうワットであれば、皿で食べるという行為が理解不能に落ちいることはないはずであろう。また、小説『モロイ』の主人公モロイは小石を口に含んで飢えや渇きを癒すと言うが、皿で食べるという行為

と、小石をしゃぶるという行為とでは、食事を取るという人間の生命維持に関して断絶や矛盾があるのであろうか。皿から食べる方法は文明の進化を意味し、一方、小石をしゃぶる方法は原始の野生を示しており、小石は人間の社会生活への拒否であると受け止めるべきであるのか。

ベケットは月や太陽を嫌うように、大地の生物である人間の生きる行為にも反感を示す。人間は働き、生の実質をけがすからである。こういう人生観の持ち主であれば、食事を取る行為は、労働にはげむ人間を養うことへとつながる。労働が必要悪であるとはいえ、ベケットの登場人物たちにとっては、それは許容しがたいことであり、食事は最小限に留めることが肝要となる。一方、小石をしゃぶることは見せかけの食事であって、実際のところは何も食べていないことを意味する。だから、モロイは小石をしゃぶることには抵抗を示さない。彼は、『地獄の一季節』の詩人ランボーの血統につながる一族であるのだろう。詩人は「飢え」の詩で宣言する。

おれに食べる気持ちがあるとしてもだ、
それはせいぜい土のかたまりや石ころだ。
おれがいつも朝に食べるものは空気だの、
岩や石炭や鉄のかたまり⁽⁴⁾なんだ。

ベケットは、人の生きる権利にも食べる権利にも悪魔払いをかける。小説家は唱えるだろう、人が「皿で食べる」ことの意味が分らないと。そして、「為されたこととは何か」と反撃を加える。ワットは精神病院で「うしろ向き」に歩いて転び、顔も手も血だらけにし、まるでキリストのようだという印象を患者仲間に与えた。彼の歩き方はまた、彼の話し方に類似していた。ワットは話すときに文法や発音を無視するだけでは足りず、彼は単語を後ろから話した。例えば話し相手の言葉が分から

なかったとき、彼は「ンナテッスデ、イレツシ⁽¹⁵⁾」と言った。このように単語を後ろから反対に話す言い方は、文脈が明瞭な場合は相手に通じることが有り得ようが、ほとんどの場合、非常な困難を要するであろう。なぜベケットはこれほどまでに、意思の疎通を遮断しようとするのか。それも話し相手が嫌いな人物であるなら、その人物に混乱を引き起こすためと理解できるが、同病の患者仲間に対しても意思の伝達を曖昧にしようとするのはなぜだろうか。彼は人間社会の在り方に不審を抱いている。この社会を真実の姿に取り戻したいと願っている。その時、個人としての人間が確立された社会秩序に対抗するためには、どんな手段が残されているのか。彼はこの汚れた外部世界の様態に対して、言葉によりまず悪魔払いを仕掛けるであろう。それは世界の意味を混沌とした謎に置きかえることである。

三、呪文

世界を新しい秩序のもとに再建しなければならない。そのためには既存の秩序を崩壊させることから始めるしかないと考えとしても、政治活動や社会運動によって変革をもたらすことは、一個人にとって難しい。ベケットが考える新しい秩序といっても、公平で民主的な社会を目指すというものとははるかに隔たっていて、いやむしろ正反対でさえあって、彼は無秩序な混沌とした世界をむしろ志向している。生きること自体に価値があるのかどうか、これさえも疑問に付そうとする。彼は肉体を椅子に固定して、動けなくさせてしまうだろう。パンを食べるよりも小石をしゃぶるだろう。ワットは、「自分のことをもはや人間と呼ぶことはできなかつた⁽¹⁶⁾」と実感するが、外の世界に対し、これを意味づけるところの主体である人間、この主体である自己を「人間」と呼べないとすれ

ば、一体、世界は何によって秩序を得ることが可能なのであろうか。世界は人間がいなくても、様々な自然の事物や動植物で形成されている。ましてや生き物が人間であろうがなかろうが、世界にとっては海の砂粒ほどの価値しか持たないであろう。しかし、或る人物が自分を人間でない他の動物と考えるとしても、その者はなおも世界に対し言葉をもって問いかけるであろう。そして、その言葉が世界にとって、そしてそれを聞いた別の人物にとって、重い意味を帯びる時が来る。

文章の間をまったく空白と同じようになるまで、言葉で塗りつぶしてしまう方がいい、そうすれば、馬鹿げたことはその本来の顔、間抜けで解決しようのない無意味さを表わすだろう〔……⁽⁷⁾〕

「言葉による馬鹿げたことは、無意味さの本来の顔を表わす」。こう考えるのは小石をしゃぶって飢えをしのぐと言った、小説『モロイ』（一九五一年）の主人公モロイである。世界の意味は、人間の慣習によってすでに確立されている。しかし、この社会慣習が誰にとっても有意義に作用するわけではない。特に体に不自由を抱える人物であるなら、肉体の健全な人間に合わせて作られている制度は、彼に不満を覚えさせるであろう。ワットのうしろ向きの歩行は小説上の誇張された戯画と理解するとしても、モロイの場合は両足が硬直し、松葉杖をついてしか歩けないと言う。こうなった理由が事故なのか病気なのか、それとも戦争による負傷なのか、作者は説明を与えないが、とにかく彼は足が不自由である。こういう障害を抱える人間にとって、一般社会の制度は何かと不都合にできている。ベケットがモロイに肉体的不自由を負わせて理由を述べないのは、人間社会の虚偽をあばくために、故意に主人公を劣悪な条件に設定したとも考えられる。ベケットはこのモロイに関しても、強烈な戯画を加えている。「森の中を爬行^{はこう}の姿勢で、一日に十五歩分は進

⁽¹⁸⁾
んだ」。

ベケットにとって正常であるはずの社会の方が、かえって虚偽を含んでいる。だから、彼は言葉によって、それを無意味に変換するのだと言う。無意味である状態こそが、本当の顔である真実を表明している。社会にとって秩序があるように見えるのは、人間各自の個人的な条件を捨象しているのであって、本当の生きがいは隠蔽されている。これを取り除くことが現代人にとっては不可欠であり、その方法として、ベケットは物事を無意味に還元せよと説得する。この作家の登場人物は地上を照らす月を嫌っているが、夜の闇を和らげる月に嫌悪感を覚える人は一般的に稀であろう。ベケットはこの価値観を否定して、彼の説く無意味さへと読者を誘導するのにこんな冗談を与える。「月というのはまったく馬鹿なんだ。いつも見せているものといったら、あの尻なんだから⁽¹⁹⁾」。闇の世界を志向する人物にとって、少しの光線も邪魔になる。この月を無意味なものとして意味づけるのに、まともな論理で臨んだのでは効果を発揮しない。無意味を捉えようと思ったら、それまでの価値観に爆弾を仕掛けるような戯画が必要になる。無意味とはこの地上において、完全に不必要ということではない。それはそれまで信じられていた一般的価値観を転倒させて、或る一個人にとっての新たな価値を付与することである。だから、無意味は何もないという虚無に帰着するどころか、反対に本当の姿である真実を開示することへと導く。

ベケットは外なる世界の価値観を戯画により、そして悪魔払いによって払拭しようとする。これは世界の邪悪からまず自分自身を切り離して、隔離しようとする最初的手段とも言えよう。それでは、こうした社会環境に対して、自分から積極的に行動を仕掛ける手段はないのであろうか。モロイは決意するだろう、「世界から離れて、その喧噪、その陰謀、そのかみ傷、それにその陰気な輝きから遠ざかり、私は世界を裁く⁽²⁰⁾」と。自分の名前さえ忘却していたモロイにしては、力強い言葉である。「世

界を裁く」。でも、その方法は何か。満身に歩行もできない人間が何の権力を持って、外なる世界に挑戦を仕掛けるというのであろうか。例によってベケットの主人公が手中にする武器は、剣でも銃でもなければ社会の法でもない。彼的手段といえば言葉である。その言葉とは自らがその主体となって発することの可能なもの、「呪文」である。

呪文が存在しないように思えるのは、全体に対してである。たぶん全体など有りはしないのだ、死後⁽²¹⁾においてしか。

呪文は世界を遠ざけて、その唱える者自身を中心に置く。誰も呪文を念ずる者に対して黙ることを要求することはできない。なぜなら、その小声で、また時に大声で何かを唱える人物に、それが何を意味しているのか、尋ねることなど誰にも出来ないことだからである。たとえその意味を尋ねたところで、返ってくる返事は黙殺か、よくて皮肉^{とげ}の刺でしかないだろう。呪文の意味は誰にも察知されることなく、ただ一人唱道者だけが、自分の精神の中で煮えたぎらせることの可能なものである。たとえその音声を他人が聞き取って同じように反復したとしても、その呪文の意味が解釈されることはあり得ない。呪文の意味とは単なる音声の解釈ではなく、音声に込められた力であり、憎悪であり、執念であり、非望であって、それらが魔力となる時にのみ作用する。呪文は表面的な意味であることを飛び越えて、対象へと直接向かう、有無を言わせぬ実力行使なのである。

まず先に言うておこう、私は誰も許しはしない。みんなの者に祈ってやる、むごたらしい人生と、地獄の炎と氷と、それに未来の忌まわしい世代⁽²²⁾における名声とを。

小説『マロウンは死ぬ』（一九五一年）の語り手マロウンが言う、呪いの言葉とも呼べるような呪文である。彼は他人に対して、「むごたらしい人生を祈ってやる」と唱える。なぜ彼はこれ程までに、外の世界の人間に対して忌まわしい言葉を投げかけるのか。彼の人生自体がむごいものであったためなのか。彼はモロイと同様もはや歩くことはできず、松葉杖を頼りにしている。そして、ベッドに横になったままで、鉛筆で物語を書き留めようとしている。彼は肉体の不自由に怒りを覚えているのか。それとも、地上に生存する人間でありながら、その生きる意味が分からず、人生の目標が持てないことに苛立っているのか。彼はこうした人生の不幸を呪い、この不幸を呪文にして払拭しようとする。彼は、「たった一人で何時間も動かず、呪縛されたままでうめきながら、馬鹿な愚か者を演じていたというわけだ⁽²³⁾」と言う。彼は自分の人生自体が何かによって「呪縛」されているがために、他人に対しても呪詛の言葉を投げかけて、自分の不幸を悪魔払いしようとするのか。しかし、他人に不運の言葉を送りつけたところで、自分の人生が取り返せるわけではない。彼には自分の不幸な境遇を「うめき」、後悔の念にひたるしか方法がない。

他人に対して呪詛の言葉を吐くか、それとも、自分の新世界を開くために呪文を唱えるか。出来ることなら後者であって欲しいと、マロウンならずとも願うことであろう。人生が忌まわしいものであり、地獄の炎と氷塊でしかないとしても、人が生きている以上、自分に見合った人生の意義を見出さなければならない。世界が人間の社会性により毒されているとしても、人は己の新しい意味を問い、他人からは無意味と思えるようなものであろうと、価値観の刷新を図らねばならない。マロウンは言うだろう、「杖をなくしてみても初めて、それが何であったのか、それが自分にとって何を意味していたのかを理解する」と。そして、「我が身に降りかかってきたこの本当の破局の中に、不幸を幸福へと変えるものを私は見過ごさない⁽²⁴⁾」。「破局」は幸福へと導く指標となるであろう。

しかし、破局の中で降参してしまったのでは、いかなる未来もない。破局の中であって、その肉体的負傷、精神的挫折、社会的軽蔑、生存の不自由から、自らを自力で救出するだけの気力を持たなければならない。この気力をどうやって湧き起こすのか。マロウンに残されている闘争の手段は、ただ一つしか見つからないであろう。それは彼の言葉でもって人間社会の虚偽に悪魔払いをかけ、彼の理想とする世界に向けて呪文を唱えることである。

人はなぜ生きるのか、人はなぜ働くのか、人はなぜ食べるのか、こうした生物としての基本的な行為に対し、ベケットはあからさまに侮蔑の声を投げかけてくる。こうした疑問に答えを与えるのは難しい。人はすでに生きているし、すべからく食物を確保して、生命を絶やさないことを本能として身に付けているからである。この現在において生存している以上、明日も生き続けることを疑ってはならない。いずれ死が訪れることを知る以上に、明日も今日の自分があることを人は信じている。

しかし、ベケットはこうした^{あんねい}安寧な世界を拒絶する。彼は人間の社会生活を無意味に落とし、そこに真実の世界を捉えようとする。世界の虚偽に対して、彼は自分の唯一の武器である言葉により悪魔払いを行い、真実の世界に向かって呪文を投げかける。たとえそれが一個人の孤立した闘争であり、敗北への道を滑り落ちていくものであっても、ベケットは最後まで悪魔払いの呪文を止めはしないだろう。マーフィー、ワット、モロイ、マロウンの主人公に続いて、小説作品に登場する『名づけえぬもの』の語り手は、「しゃべらざるをえないんだ。絶対に黙らないぞ」と決意する。話し続けることはベケットにとって、世界の忌まわしい悪霊を追い払う呪文なのである。

注

- (1) サミュエル・ベケット、『マーフィー』、Samuel Beckett, *Murphy*, Les Éditions de Minuit, 1947, p. 9
- (2) 前掲書、p. 10
- (3) 前掲書、p. 64
- (4) 前掲書、p. 59
- (5) 前掲書、p. 64
- (6) 前掲書、p. 39
- (7) 前掲書、p. 145
- (8) 『ワット』、Beckett, *Watt*, Les Éditions de Minuit, 1968, p. 41
- (9) 前掲書、pp. 163-164
- (10) 前掲書、p. 81
- (11) 前掲書、p. 81
- (12) 前掲書、p. 78
- (13) 前掲書、p. 120
- (14) アルチュール・ランボー、「飢え」、『地獄の一季節』、Arthur Rimbaud, *Faim, Une Saison en enfer; Œuvres complètes*, Gallimard, Bibliothèque de la Pléiade, 1972, p. 109
- (15) 『ワット』、*Watt*, p. 173. ワットはこう話した：Nodrap-p-p-p, disait Watt. Nodrap-p-p, nodrap-p.
- (16) 前掲書、p. 83
- (17) 『モロイ』、Beckett, *Molloy*, Les Éditions de Minuit, 1951, p. 17
- (18) 前掲書、p. 138
- (19) 前掲書、p. 58
- (20) 前掲書、p. 171
- (21) 前掲書、p. 39
- (22) 『マロウンは死ぬ』、Beckett, *Malone meurt*, Les Éditions de Minuit, 1951, p. 9
- (23) 前掲書、p. 33
- (24) 前掲書、pp. 133-134
- (25) 『名づけえぬもの』、Beckett, *L'Innommable*, Les Éditions de Minuit, 1953, p. 8

